

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	横井川 美佳
論文題目	幼児期における自己認識の発達を支える保育・療育 —手指操作と実行機能および自己認識の発達連関をもとに—		

(論文内容の要旨)

幼児期には、自我の拡大と充実を基礎として、自己を客観的に見て多面的・形成的に自らをとらえる自己認識が生成発展し始める。このような自己認識の形成と充実を支えることが、幼児期の子どもたちの発達を支援する上で重要と考えた。

第1章では、序論として、幼児期の自己認識の発達研究に関連する国内外の研究動向をまとめ、本研究の目的を示した。近年、発達に系統的な援助を必要とする子どもたちが増加し、保育・教育・医療・福祉の各分野の重要な課題となっている。幼児期は自己認識を深めていくとともに、手指操作の面では両手の交互開閉、認知機能では実行機能などが顕著に発達する時期である。本研究では、①幼児期の手指操作と実行機能および自己認識の関連性を検証し、②保育者・療育者・保護者が、子どもたちを支える保育・療育の場面でどのようなことをポジティブな経験として受けとめているかを調査した。それをもとに、幼児期の自己認識の発達を支える保育・療育のあり方を考察した。

第2章では、幼児期の手指操作の発達の特徴について検討した。幼児56名(男児37名、女児19名、3歳8か月～6歳7か月)を対象として、手指の把握圧の変動を「握り圧計」で測定した。両手交互開閉の課題を、①モデルあり1秒切り換え、②モデルあり2秒切り換え、③モデルなしの3つの条件で実施して握り圧の波形データの相関分析を行い、年齢群による発達的な特徴の違いを定量的に解析した。

モデルに合わせた両手交互開閉操作は、4歳から6歳にかけて漸進的に獲得された。モデルを見ずに行う操作は、5歳後半以降に左右の開閉操作の正確性が高まった。自律的な交互開閉操作は時間をかけて獲得されると推察される。手指操作の発達の特徵に着目して事例検討を行い、生活場面での様子と交互開閉との対応関係を検討した。両手交互開閉操作のもつれは単に手の操作の問題だけでなく、場面に応じた気持ちの切り換えのむずかしさなど生活上の困難さと対応していたことが注目される。

第3章では、幼児期の手指操作と自己認識の発達の関連性について検討した。上記と同じ56名の幼児について、両手交互開閉操作の課題に加えて、自己認識の発達水準をとらえるために新たに自画像の描画課題を実施し、グッドイナフ人物画知能検査の採点基準で自画像得点を算出した。月齢を統制した相関分析によって交互開閉と自画像得点の関連を検討したところ男女で違いがあり、特に男児ではモデルを見ずに行う両手交互開閉操作と自画像描画の得点に有意な相関があった。自己認識を深めていくためには、提示されるモデルに受動的に合わせるのではなく、自発的・能動的・主体的な活動を保障する保育・療育の重要性が示唆される。

第4章では、幼児期の手指操作（交互開閉）と認知機能（実行機能）及び自己認識（自画像描画）の発達的な関連性を検討した。幼児54名（男児20名、女児34名、2歳7か月～6歳5か月）を対象として、上記と同様の交互開閉課題3条件と自画像描画、また新たに実行機能の課題（DCCS課題、数復唱課題）を実施した。

3歳群から4歳群では、交互開閉のモデルあり1秒切り換えの操作性が有意に高まっていた。5歳群と6歳群の間では、モデルあり2秒切り換えの操作力が向上するとともに、モデルなし条件での自律的な自分のリズムで交互開閉を行う力量が飛躍することが示唆された。月齢を統制した偏相関分析から、自己認識の水準は実行機能の各課題（DCCSと数復唱）と有意な相関があり、また実行機能のうちDCCS課題（抑制および切り換え機能）の水準はモデルあり2秒切り換え交互開閉と有意な相関がみられた。また数復唱課題（ワーキングメモリ）はモデルなし両手交互開閉操作と関連していた。自己認識は手指操作や認知機能の発達の基礎にあると推察される。

3歳群において、モデルを見ずに行う交互開閉がむずかしかった事例でも、実験者がその子の手を下で支えたところ、交互開閉の力の芽生えを導くことができた。保育・療育の場面での援助の工夫によって、幼児期の発達をよりよく支えていくことができよう。

第5章では、幼児期の保育に取り組んでいる保育者・療育者・保護者を対象として質問紙調査研究を行い、発達に支援が必要な子どもたちとの関わりの中でのポジティブな経験のエピソードと、子どもたちとの関わりの中での肯定的な感情の関連性を検討した。保育施設の保育者は「子どもたちの行動面での変化や成功体験」を重視しており、療育施設の支援者は「子どもの思いの表出」や「保護者との連携」、「大人自身の好感情」をポジティブな経験として重視する傾向にあった。また保育や子育てを「うまくいっている」と好評価した群は、子どもたちの行動面の変化ではなく、気持ちや思いそのものに意識を向けていた。子どもたちの自己認識の発達についての理解を深め、その子が発信している自分自身の気持ちや思い受けとめることで得られるポジティブな養育経験が、支える大人自身の自己信頼性を啓培し、幼児期の保育・療育を支えるといえよう。

第6章では、本研究で得られた知見をもとに、子どもたちの自己認識を深める保育・療育の重要性について総合考察した。また、本研究で取り入れた研究方法について方法論的検討を行い、今後の課題と展望を提起した。さらに、今回の研究対象の中で特に丁寧な支援を必要としていた幼児3名については、自己認識の発達に焦点をあてた援助の具体的な内容と方法について事例検討を行い、補論としてまとめた。

(論文審査の結果の要旨)

幼児期には、2～3歳代での自我の拡大と充実の時期を経て、4歳代には左右の手の交互開閉操作の獲得とともに、ねばりづよく頑張る力（自励心）や自己の欲求や行動を自制し抑制する力（自制心）が形成される。その後5～6歳代には、手指の把握力量を徐々に変化させる繊細な操作力を獲得することによって、自己認識の時間成分として、自分自身の発達的な変化をとらえる力（自己形成視）の萌芽がみられる。また自己認識の空間的成分として、自分自身を客観的に認識して他者の視点から自分をみつめ、繊細に多面的に自己評価する力（自己多面視）が形成され充実していく。

これまで、幼児期の発達において自我の育ちや自己認識の深まりが重要であることは、保育や療育の場面で実践的に提起されてきたが、自己認識の生成発展が他の機能とどのように関連しあって子どもたちの全面発達を実現しているかは明らかでなかった。本研究は、幼児期の自己認識が個別的な諸機能によってどのように支えられているかを検証し、とくに3～5歳頃に顕著に発達する手指操作（手の交互開閉）および認知的な機能（実行機能）に着目して自己認識との関連性を検討して、幼児期の新たな保育・療育のあり方を考察した。

本研究では、幼児期での自己認識の発達の意義を明らかにするために、2～6歳代の子どもたちを対象として面談と実験を行い、保育・療育施設のスタッフおよび保護者への質問紙調査を実施した。論文は第1章「序論」、第2章「交互開閉操作の発達の变化」、第3章「自己認識と交互開閉操作の関連性」、第4章「自己認識と交互開閉操作、実行機能の関連性」、第5章「保育・療育場面でのポジティブな経験」、第6章「総合考察」から構成され、補論として幼児3名の「事例検討」が加えられている。本研究には次の3つの重要な特色があり、貴重な成果が得られていると評価できる。

●特色1：研究方法

幼児の手指の制御過程を定量的に測定し評価するために、わが国で独自に開発された「精神作業過程測定装置」（ゴムバルブによる握り圧測定装置。「握り圧計」と命名）を改良して、幼児の手指操作の特徴を定量的に測定し分析した。さらに把握圧の波形データをデジタル信号に変換して、手指操作の力量成分と時間成分を正確に測定・評価し、把握圧の制御過程をパソコン上でより容易に精密に解析して他の諸機能との関連を綿密に検討した。左右の把握操作の一致度を、把握圧の数値データの相関分析および相互相関分析を用いて定量的に検証することにも初めて成功している。

●特色2：自己認識と手指操作および認知機能の関連性に関する新たな知見

1) 両手交互開閉操作の発達の变化の特徴が新たに明らかになった。①2秒に1回のゆっくりしたリズムでの交互開閉は、1秒に1回よりも容易で、発達の早い時期に獲得されると予想されていたが、実際には1秒リズムよりも獲得が遅れていた。2秒リズムの交互開閉の獲得には、認知的な抑制性の制御と、自己認識としての自励心・自制

心の形成が必要とみられる。また、②モデルを見ず行う自律的な交互開閉は、5歳半ば以降に左右の交互開閉の正確性が高まり、模倣での操作より獲得に時間を要していた。自らの中に新たな価値ある基準をつくって内面化することで、モデルに頼らずに行動を自己制御する力が育まれるといえよう。

2) 自己認識と手指操作の関連では、自画像描画とモデルなしの自律的な両手交互開閉に相関が見られたことから、受動的でなく能動的な活動が自己信頼性を高め自己認識を深めるために重要である可能性が示された。また、自己認識は実行機能のうちDCCS（抑制・切り換え）と数復唱（ワーキングメモリ）の課題の両方、DCCS課題はモデルあり2秒切り換え交互開閉と、数復唱課題はモデルなし交互開閉と有意な相関がみられた。自己認識が実行機能や手指操作を媒介として幼児期の発達を支えていると推察される。

3) 事例分析を深めることによって、本研究の定量的な相関分析の結果が、幼児期の子どもたちの生活場面での行動特徴とどのように関連しているかを明らかにした。

●特色3：保育者・療育者・保護者のポジティブな養育経験の意義

本研究では、幼児期の保育に取り組んでいる保育者・療育者・保護者を対象として、発達に支援が必要な子どもたちとの関わりの中でのポジティブな経験について、エピソードの自由記述による質問紙調査で把握した。保育者は「子どもの行動変化や成功体験」を、療育者は「子ども自身の気持ちや思いの表出」や「保護者との連携」「大人自身の好感情」をポジティブな経験として挙げていた。子どもたちを表面的な行動だけで評価せず、できるだけ内面に分け入って、その子自身が自分の思いをどのように実感しどのように伝えようとしているのかを受けとめた保育・療育の重要性が示唆される。

本論文は、独自の新たな研究方法・データ解析方法を駆使して、幼児期の自己認識が手指操作や認知機能と発達的な関連性をもって形成され充実していくことを明らかにし、自己認識に着目した保育・療育の重要性を提起した。この基礎研究の成果は、幼児期の保育・療育の領域だけでなく、乳幼児期から児童期、青年期に至る人間発達の過程での新たな発達的な援助の観点の提起につながる貴重な意義をもっている。

以上から、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認めるとともに、2024年1月25日に論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降